The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	1930年代の中井正一再考 : メディア／思想／社会
Author(s)	門部, 昌志
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43310
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【7】

氏　　名	門部昌志（もんべ まさし）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　16716　号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科社会学専攻
学位論文名	1930年代の中井正一再考　－メディア／思想／社会－
論文審査委員	（主査） 教　授　伊藤　公雄 （副査） 教　授　木前　利秋　　助教授　山中　浩司

論文内容の要旨

1-1. 美学者、中井正一

日本ファシズムの台頭した1930年代、中井正一は同人雑誌『世界文化』や隔週刊の新聞『土曜日』を通して反ファシズム文化運動に参加した。人民戦線的な実践に従事する一方、中井は集団的主体性の論理の探求を行っている。彼は「いわれる論理」「書かれる論理」「印刷される論理」など、古代、中世、近代に現れた各時代の論理の再編制を模索した論考「委員会の論理」(1936) を発表している。

1-2. 研究の目的

本稿では、30年代に中井が発表したテクストを中心に彼の思想を再構成した。その際、メディアと思惟形態の関連という問題系、また中井における機能概念の受容及びその理論的諸帰結に注目した。ただし、テクストが世界内的な存在だとすれば、テクストの解釈は時代情況の解釈をも含むはずである。本稿の第四章では、中井のテクストを30年代というコンテクストに位置づける試みを行っている。

2. 中井正一とメディア論的思考

第一章では、論文「言語」(1927～1928) を中心に中井におけるメディア論的思考の形成過程を検討した。

2-1. 道具的言語観の否定

1920年代の後半、中井は、言語の概念的意味ではなく、概念的意味と交錯して成立する言語の芸術的意味に関心を抱いていた。さらに中井は「伝達器」として言語を捉えることを否定する。言語によって伝達される意味ではなく、言語それ自体への注目が20年代後半に発表された中井のテクストに見出せる。

2-2. 言語メディアの歴史

道具的言語観の否定は、言語メディアの歴史的推移に対する注目に通じている。「話されたる言葉」から「書かれた言葉」へ、さらには「印刷されたる言葉」への移行、及びそれと並行して生じた思惟形態について中井は言及する。声、文字、活字という言語におけるメディアの推移に伴って、他者に向けて語られる言葉から自己に向けて語られる

言葉へ、あるいは思惟の交易としての「外なる言葉」から自己生産としての「内なる言葉」への変容が生じたことについて中井は注意を喚起している。

2-3.「委員会の論理」における定式化

20年代後半の論考で示唆されたメディアと思惟形態の問題系は論文「委員会の論理」(1936) で定式化される。それによれば「いわれる論理」「書かれる論理」「印刷される論理」は古代、中世、近代の文化に対応し、それを再編制するのが「委員会の論理」である。論文「委員会の論理」の場合、各時代の論理と並行して各時代の社会制度が記述されている。ここから、中井におけるメディア論的思考が技術決定論的なものではないことが了解される。他方、「委員会の論理」における文化の図式は上部構造論を思わせるが、経済決定論とも異なる。そこには社会変動における観念の役割を重視する視点が含まれているからである。

道具的言語観を否定する中井の視点は、言語メディアの歴史に対する関心へと発展し、「委員会の論理」において技術決定論とも経済決定論とも異なる形で定式化された。20年代から30年代までの中井のテクストは、20世紀前半におけるメディア論的思考の先駆的事例として歴史的な意義を持っている。しかし、彼が素描したメディア史的図式の現代的な適用可能性については疑問の余地があろう。

3. 中井正一における機能概念の受容

第二章、第三章では、1930年前後における中井のテクストに見られる、機能概念の受容とその理論的帰結を扱った。その帰結とは、第一に、関係論的思考への移行であり、第二に、形而上学的区別の批判と相互転換の論理の導入、第三に、技術と芸術の領域に対する関係論的思考と二分法批判の適用である。第四は、実体としての意識の否定に基づく集団的思惟機構の模索である。

3-1. 関係論的思考

『実体概念と関数概念』におけるカッシーラーによると、実体概念では、記憶表象から共通の要素が抽象され、それを一つの類に結合することによって概念が生じる。この手続きをより高い水準にまで繰り返すことにより、「概念ピラミッド」が現れる。この場合、概念の意味内容（内包）が少なくなるにつれ、概念の適用範囲（外延）は拡大する。この操作を徹底化すると、「もっとも普遍的な概念は特筆すべき特徴や規定性をもたないということになる」。ここで実体概念は空虚で抽象的なものとなる。この実体概念に対置されるのが関数概念（Funktionsbegriff）である。それは概念対象間の＜関係＞から出発する思考を前提とする。この思考において、個々の部分は分離されるのではなく、体系における関係構造で把握される。事物はあらゆる関連に先行する自立的実在として措定されるのではなく、観念的な相互性における「関係項」となる。「横能」や「函数」という術語を用いて中井はカッシーラーの議論を摂取する。例えば、「たがいに規定しあう関連的組織に融合する函数形」といった表現にそれはあらわれている。

3-2. 形而上学的区別の批判

『実体概念と関数概念』でカッシーラーは形而上学的区別をも批判している。それによると「形而上学に特有の手続き」は、認識の領域において相互的にのみ規定される一対の観点を分離させること、論理的に相関するものを事物的に対立するものへと解釈し直すことである。形而上学的区別に対して、カッシーラーは分離された「不動の境界」ではなく「不断に移りゆく可動の境界」を問題にすべきだと主張する。例えば、認識の現在の段階は、「過去のものと較べてみれば『客観的』と見えるのと同様に、将来のものに較べれば『主観的』である」。形而上学的区別への批判は中井の著作にも読みとれる。中井によれば「形而上学は伝統的にしばしば、思惟と実在、主観と客観、物と精神などをおのおの分離対立した『物』として論じすぎた」のであり、さらに「現代の唯物論の考えかたにもまた、この形而上的解釈、すなわち観念を一つの作用の実体的根拠と考える誤謬に誘い込まれている」側面がある。主観／客観という対立概念について中井は、「機能概念よりすれば、むしろ消滅し解体さるべき」であると述べる。両者は自立した実体的存在ではなく、観念的な相互性において与えられうる関係項である。「カッシラーにとっては現在の状態は過去のそれに付して客観的と考えらるると同時に、現在の状態は未来のそれに比して主観的と考えられる。すなわ

ちその間には函数的関係が成立する」。認識の現在の状態は、過去、未来との関係に応じて、主観的とも客観的とも考えられる。比較する他のものとの関係によって転換が生じるという相互転換の論理がここに見出せる。

中井はこの相互転換の論理を他の問題にも転用する。例えば、現実／非現実、芸術／非芸術の関係などである。先に見た相互転換の論理は、二分法批判の意味における「収斂」の問題［Livingstone, 1993］と交錯するが、中井の場合、対立が統一される側面のみならず、統一から分裂が生じる側面に注目している点で際立っている。この思考によって中井は対立を批判するのみならず、境界線の移動について語りえた。

3-3. 実体としての意識の否定／集団的思惟機構の探究

機能概念によって事物の実体的概念は否定された。実体としての対象を否定することは、それを映す実体としての意識を否定することでもある。中井は関係論的に意識を捉え直し、個人的意識をこえた集団的思惟の機構を構想する。その際、知覚は身体のみならず機械を含めて捉えられている。「今や、歴史的段階は、個人的意識段階を乗り越えて、集団的意識段階に向かいつつある。…機械的技術を中に含めて、レンズ、フィルム、電話、真空管、印刷などの機構を貫いて、物質的感覚ともいうべきものが、集団人間の感覚として、表現、観照の要素となり始めた。それらの感覚要素を素材として委員会という近代的集団的思惟の機構は、個性単位の意識を越えたる新たなる性格を、人間社会に導入するにいたった」。中井は、個人を実体的に把握し、個人的意識の集合体として委員会を位置づけたのではない。彼は、実体としての意識を否定した上で、メディアに媒介された集団的思惟の機構を構想していたのである。

4. 集団的思惟機構としての新聞と映画

第四章と第五章では、メディアに媒介された集団的思惟機構の例として、活字メディアをめぐる中井の実践、及び繋辞の欠如に関する中井の映画理論を検討した。

4-1.『土曜日』における実践：執筆者と読者の交叉

1930年、中井を含む美学研究者によって美学の理論研究をめざす同人雑誌、『美・批評』が創刊された。しかし、瀧川事件に直面した『美・批評』は一時休刊となる。その後、学問的自由の擁護を掲げた第二次『美・批評』が再刊された。この時点で『美・批評』は、唯物論者と自由主義者の連携という人民戦線的編成をとっている。この第二次『美・批評』はさらに反ファシズム文化運動である『世界文化』へと発展し、これに加えて大衆的な『土曜日』が創刊された。平林一が暗黙の内に図式化したように、1930年代において中井の美学的探求は政治的抵抗に変化したかのように見える。しかし『土曜日』の政治的抵抗は中井にとって集団的芸術の実践をも意味していた。

軍国主義的風潮に共感する民衆と批判的知識人の分裂という状況にあって、『土曜日』は送り手と受け手、又は執筆者と読者を交叉させることで、知識人と大衆の分裂を乗り越えようと試みた。ただし、執筆者と読者がそれぞれ知識人と大衆に対応するのではない。執筆者と読者の双方は一枚岩ではなかったからである。狭義の執筆陣は、唯物論者と自由主義者を含む世界文化グループと　『京都スタヂオ通信』を発行していた庶民的な映画俳優、斎藤雷太郎の合流からなっていた。他方、読者、及び投稿という形式における広義の執筆陣にも、学生や勤労者、女性が含まれていた。『土曜日』は女性や労働者をもまきこんだ多元的な議論の空間を創出しようと努力したのである。さらに大阪や京都の喫茶店に置かれ、時には読者によって遠方に運ばれることもあったという意味で、『土曜日』が生み出す議論の空間は、都市のみならず地方への広がりをもっていたことになる。しかし、次第に女性による投稿の数は減少し、『土曜日』それ自体が学生とインテリの遊びとして揶揄される事態も生じている。複数性をはらんだ議論の空間を創出する『土曜日』の試みを過度に理想化することは避けるべきであろう。

4-2. 中井正一の映画論：製作する観客

論文「思想的危機における芸術ならびにその動向」(1932) で中井は、専門化過程の徹底によって生じた大衆化、さらに芸術の領域で進行する商品化といった30年代の思想的危機を分析している。この思想的危機では個人主義機構から集団主義機構への転換が進行しており、それに追いつき追い抜く美学を構築する手がかりとして中井が注目するのが映画である。しかし、中井は映画を無批判に肯定したわけではない。「コンティニュイティーの論理性」(1936)

では、タイアップした産業による大衆の動員と馴致を中井は批判した。しかし、彼はペシミズムに陥ることなく、観客による映画の受容に小さな可能性を見いだそうとする。この問題は、戦後の『美学入門』に継承される。

中井によれば「遠近法の空間」は、確立された個人の視点を前提とし、それによって全世界の体系が構成される近代の空間である。そこでは、世界の観察者としての主観が確立されている。これに対応する表現が絵画である。次に「図式空間」は、絵画の危機以降に現れたものであり、レンズの見方によって構成される世界像に対応する。個人の視点を軸として構成される「遠近法の空間」とは異なり、「図式空間」で世界を構成するのはレンズの見方、いわば物質的視覚である。この物質的視覚は映画の特徴の一つでもあるが、映画の場合、フィルムが編集される点が異なっている。ここで問題となるのが「切断空間」である。映画では、カットとカットが結合される際、文学のような「である」「でない」といった繋辞が欠けている。レンズの見方から構成される世界像としての「図式空間」は、映画の場合、繋辞なしの「切断」によって結合されているのである。製作者が意図をこめてカットとカットを繋ぐこと、あるいはトーキーや字幕が繋辞の役割を果たす可能性もある。これらを前提としつつも、中井は、繋辞なきフィルムの切断を連続するのは大衆の歴史的意欲であり、歴史的主体性だと主張する。

中井による映画理論では、創作の仕上げを観客が行うという意味での相互性が映画の集団性に含まれているのである。『土曜日』の読者投稿がテクスト生産における相互性を実践したものであったとすれば、中井の映画理論では、映像テクストの集団的製作に加え、受容におけるテクスト構築という意味での集団性が言語化されていたのである。

4-3. メディアに媒介された集団的知覚

映画の集団性がテクストの生産と受容に関わると述べる時、それは単に個人の集合ではなく、主観の崩壊を前提としていることに注意しなければならない。個人の主観によって構成される近代的世界像である「遠近法の空間」の後に現れ、レンズによって構成される世界像が「図式空間」であった。繋辞なき映画の「切断空間」では、カットとカットが観客によって結合される。これはメディアのもたらす物質的感覚と人間的判断の結合からなる集団的知覚である。それは単に個人的主観の集合体であるのではなく、主観の崩壊以後に摸索された集団的な知覚の形式である。ここに中井における委員会の一つのモデルが見出せる。

4-4. 機能の論理への批判

「委員会の論理」以前、既に中井は関係論的思考を導入していた。したがって、集団や委員会を実体的なものと考えることはできない。しかしながら、中井の委員会は個が全体に規定される一枚岩の構造ではない。機械時代に適応した理論では主観が解体し「意識のない関係構造」に全体が溶解する。「委員会の論理」には弁証法的発想が含まれているが、後年、中井はそれを機械時代に対抗するものと位置づけている。論文「委員会の論理」において機能の論理が持つ価値は限定的であり、委員会は全体のなかに個が溶解する一元的な関係構造とは考えられてはいない。ここで注目されるのが主体性に含まれる分裂の契機である。

4-5. 分裂の契機

中井において弁証法的主体性は自己関係的な否定によって分裂する過程であった。それを組織のレベルに適用したのが集団的主体性である。委員会の論理にも無限に回帰する分裂の過程が含まれており、それは集団的コミュニケーションの次元における提案、計画、報告、批判という循環的な過程に対応する。委員会のコミュニケーションにおける分裂は静態的な関係構造に抵抗するものである。

5. 戦後日本の批判的コミュニケーション研究と中井正一

エピローグでは、戦前の中井と戦後日本の批判的コミュニケーション研究の連続性に注目し、鶴見俊輔の議論を中心に検討した。戦後日本のマス・コミュニケーション研究では、アメリカ流の実証的な研究が主流となっていた。これに対し鶴見俊輔は、マルクス主義とプラグマティズムの両者の遺産をつぎながら、コミュニケーション研究における批判的視座を提示した。その鶴見によって美学者、中井はコミュニケーション研究の先駆者として位置づけられている。中井の視点を創造的に受容しつつ、鶴見はコミュニケイション思想史や批判的サークル論などの議論を展開す

る。これは後の研究者によって発展的に継承されるが、それにはメディア論的議論とコミュニケーション的議論への分岐が伴っている。エピローグでは、むしろ中井の議論に立ち戻り、委員会においてはメディアに媒介された集団的知覚と集団的コミュニケーションが交叉していることを確認した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、近代日本思想史におけるコミュニケーション論研究の先駆者の一人である中井正一をめぐって、彼の思想をコミュニケーション論の視点から整理するとともに、これをメディア論の文脈からも読み解くことで、新たな知見を加えたものとして評価することができます。なかでも、論文「言語」や「委員会の論理」などを軸に、「話されたる言葉」「書かれた言葉」「印刷された言葉」という形でとらえられた言語メディアの歴史的推移（後のマクルーハンの理論の先取りともいえる）をめぐる議論や、思惟・討論・実践のそれぞれの領域の相互のかかわりあいの動的プロセスのなかでコミュニケーションの問題を論じた中井像の提示は、今後のメディア研究やコミュニケーション研究にとっても多くの示唆を与えるものといえます。

また、申請者は、中井の思想をコミュニケーション論の視座から整理してみせたに止まらず、それを彼が生きた時代精神と結び付けて論ずることで、中井の思想および理論を肉付けする作業を行っています。特に、1930年代の京都における『美・批評』や『土曜日』などのメディアをめぐる、中井と人民戦線の運動とのかかわりを明らかにすることで、中井の思想が、具体的な実践を通してはぐくまれたものであることを明らかにした作業は、戦後の中井の思想形成ともからんで、多くの示唆を与えてくれます。

以上、の観点から、本論文は、博士（人間科学）の授与にふさわしいものと判定いたします。